

延原謙探偵小説選Ⅱ
目次

《延原謙作品集》

狼	2	カフエ為我井の客	78
カフエ・タイガーの捕物	4	親愛悲曲	84
断片	6	毒 盃	97
幸 福	10	片耳將軍	110
尾 行	16	少年漂流奇談	115
銀座冒険	18		
人命救助未遂	20		
幽霊怪盗	24		
自 殺	40		
誌上探偵入学試験	48		
コンクリの汚点	65		
富さんの墓口	69		

《勝伸枝作品集》

創作篇

墓場の接吻	166
嘘	175
チラの原因	184
これでいいのかい	195
モダン大学	207
ラッシュ・アワー	207
蓄音機音楽礼讃	211
トオキイの生んだ波紋	215
奥様と旦那様	219
深夜二時	223
ヨンニヤン	228
甘き者よ、汝の名は	237
参つてゐる	243
身替り結婚	247

盲目物語

254

評論・随筆篇

新青年料理二種	266
女学生読本	268
ハガキ回答	275
世間ばなし	276
アメリカ主婦の現実・日本主婦の夢	278
中国青年	283
若松町時代	302
横溝正史氏の思い出	304
大トラ、小トラ	306
【編者解題】中西裕	307

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

《延原謙作品集》

狼

「あなた、相川さんじゃありませんか？」

日独キネマの事務所を出た彼女は、松屋の前で飾窓の女優風の美しい人形にほんやり見とれているところを、後から呼びかけられてはっとした。振返ってみると派手な洋服を着た二十七八の若い男がにこにこしながら立っている。どこか松竹の塚田に似ているところがあると、彼女はすぐそう思った。

「相川さんですね？ 私は日独キネマの者ですがね、あなたはいま事務所をお訪ねになったでしょう？」

「ええ、明日みょうにちもう一度来てくれって……」

「それがね、私がつい忙しかったものですから事務員がそういってお帰ししたのですけれど、あ、私は日独キ

ネマの監督の立花という者です。実は恰度あなたのような女優を一人探しているところなのですから、急いで後を追って来たわけですが、いい具合でした。どこかその辺でお茶でものみながらゆっくり御相談しましょうか。こちらへいらっしゃい」

「ええ」彼女はうれしさを包みきれないでぼっと顔を赧あかくしながら、去年の流行のオペラバグをかけた左の腕をあげてそっと髪に触ってみた。

十分間の後、二人は千疋屋せんびきやの二階でスポンヂと紅茶とを前にして対座していた。立花監督——というのは彼女の知らぬ名であつたが——はよく喋つた。単によく喋るばかりでなく、彼は所謂話上手まなじしやうずであつた。日独キネマ専属の男女優の消息によく通じているのに不思議はないが、彼はそのほか日活や松竹の有名な——彼女のあこがれの的でありライヴアルである男女優の噂にも同じほどに通じていると見え、それからそれと尽きぬ話に彼女を十分満足させ、そしてさすがその道の人だけあると妙なところで感心させた。そうして噂話の間にも時々彼はいかにも話上手に簡単な質問を挟んで彼女の返答を求め、三十分ばかりの後にはすっかり彼女の身の上を聞き出してしまつていた。即ち、彼女が甲武信岳かぶのぶたけの麓の川浦といふところの相当の地主の次女であること、彼女は活動が非

常に好きで、理想は映画女優であるのに父親が頑固で決してそれを許さないので、姉にだけ打ち明けて自分の貯金を引出して昨夜無断で出京したこと、日活や松竹のよくな大きいところで軽く扱われるよりも、日独キネマのような比較的小さな撮影所へは行って、早くいえば一躍スターになって頑固の父親を驚かし自然心も解けるようにしたいこと、姉ともそう相談して来た事などが主要な話であった。

立花監督はにこにこしながら、今度製作にかかる「花散る丘」に是非主演してもらうことにするといつて彼女を有頂天にした。

「しかしねえ、その前に一度会っておかなければならない人があるのですがいま旅行中で、今晚帰って来るはずですから、それまで中野にある撮影所でも見て来ましょう。なあに、安心していらっしやい、私がすぐにスターに仕立ててあげますよ」

そう言つて監督は勘定を払つて千疋屋を出、彼女を連れて新橋から電車に乗った。

その夕方疲れきった彼女は中野撮影所の案外貧弱だったのに淡い失望を感じながら、立花監督に連れられて神田駅から電車通りを今川橋の方へ行き、二つ目の角をちよつと曲つたところにある古びた木造洋館へはいつてい

った。入口に大川事務所とあつた。

監督は彼女をその二階の埃っぽい一室に残しておいて降りて行ったが、やがて一人の老人を連れて上つて来た。その老人の顔を一目見て、彼女ははっと尻込みした。「みどりや、お前の向う見ずにも困るよ。お父さんはどんなに心配したことか。幸いこの大川探偵を知つたものだから、すぐに電報を打つておいて出て来たが……」

彼女は眼頭めがしちが熱くなるのを感じた。

カフェ・タイガーの捕物

相変らずカフェ荒しかは少し可哀そうですね。私なんかストーヴの前に頑張つて後から来た客を煙たがらせるわけじゃなし、こうして隅の方にそつと腰をおろして三十分なり一時間なり珈琲コーヒーを楽しんで行くというだけですから、極めておとなしい客ですよ。もつともそれだけに、ためになる客というわけにはゆきまずまいがねえ。とにかく年齢からいっても荒しの部類に入るわけはありませんよ。

しかし、そこへゆくと今の若い人は凄いとしか潑刺はつらというか、なかなかやりますね。つい先日——ほら、一週間ばかり前に午後からひどい雪になったことがありましたっけね、あの日の三時頃、恰度降りだしてから間

もなくでしたよ、三田の学校の制服に黒ずんだ柿色の玉羅紗らしやの外套の青年と、すばらしい眼を持った混血児あいのこらしい娘さんとが雪を被つて飛び込んで来ましてね、その真中のテーブルに着きましたっけが、ちらほらといたお客が一せいに振向いた視線を明らかに感じておりながら平気で、臆面もなく振舞っているところは変な言葉ですが全く威風堂々いふうどうどうあたりを払うとでもいいたいくらいですよ。いえ、決してそんな、羨ましがりなんかじゃありません。純粹に驚異を経験したというに過ぎません。それにね、娘さんの方にはちよつと見覚えがあるようなんです。ま、待つて下さい、実はね、店の横浜支店の裏通りに当るんですが、オデッサという外人専門のカフェ——お判りでしょう？ その店先を通つて一二度見かけたことのある女なんです。それが三田の学生と連れだつて白昼堂々とはいって来たものですから驚いたんですが、するとそこへ若い洋服の男がひよつくりはいつて来ました。ひよいと見ると見るとほらあの本石町ほんごくちやうの、御存じでしょう近頃評判の私立探偵の大石君です。私も一度ちよつとしたことを頼んで識っているわけですが、大石君ははいつて来るといきなりその二人のところへ行つて、学生の肩に手をかけて二言三言ふたごみさんご何かいったと思うと、そのまま二人を連れて雪の中へ出て行つてしまいました。

ところがね、驚いちゃいけませんよ、さっきその大石君にここで会ったものですから訊ねてみるとね、学生風の男は大石君の部下で、女がある重大犯人の潜在場所を知ってるので、それと云わずに連れ出して来たんだそうです。こんなのはあなた方の新らしい探偵小説の材料にはなりませんかね？……

断片

持込原稿

日本では持込原稿というとひどく軽蔑され、そしてきたいに持込原稿によいものがあったためしがないというが、西洋では各出版書肆しよしに相当な読み役リイダというものが控えて、持込原稿に対して網を張っているらしい。もつとも西洋でも編輯者や出版者が「自信のある」作に悩まされることも多いと見え毎度笑話の材料になっているが、それでもこのパブリッシャス・リーダーリーダーというものがよい作家を発見して世に紹介することもなかなか多いらしい。日本でもそういう名前こそなけれ編輯者や出版者がよき新作家もがなと鵜の目鷹の目たかで同人雑誌あたりを注意しているのは事実だろう。話がわき路へそれかけたがこれはなかなか組織的に原稿の篩ふるい分けをやっているら

しいアメリカのある読み役の話である。

「……もう七八年前の話ですがその頃は私の上にもう一人ブラウンという老人がいてね、私が一度読んでみてこれならと思ったものはこの老人に廻し、ブラウン老人の鑑識に合格したものを初めて主人の手許へ差出して採否を決定することになっていました。ところがある時相当知名の女流作家から探偵小説を一篇送ってきましてねえ、例によってまず私が眼を通してみると写実的な非常に面白いものなんです。がタイトルのわきに書きこんである稿料の希望額が途方もなく大きいのです。莫大という字を使ってよいほどの金額を要求しているのです。

それで私も少し躊躇ちゅうちゆしましたがいかにも惜しい作なものですから、とにかく念のためブラウン老人の手許へ出しておきました。ところが老人も私と全く同意見で主人の手許までもかくも差出したわけなんです。主人は老人から一応説明を聞いて原稿を持って自分の部屋へ帰ってゆきましたが、よほど面白かったものと見えてその少しあとで私がちよつとした用事で行ってみた時には扉にぴんと錠がおろしてありました。

それから二三日後のことです。主人はひどく不興そうな顔でブラウン老人に先日あの原稿は先方の希望額で買い取るから小切手を送るようにと命じましたが出版の

ことは一言も話がありませんでした。あとで聞くとところによるとなんでもそれは主人自身の若い時の性的私生活を幾分誇張して書いたものだったのだそうで、まあ早くいえば脅迫状をつきつけたのと同じわけなんですね。それを何も知らないわれわれが仲継ぎして主人へ廻したのですから、考えると気の毒でした。しかし作品としてはいかにも面白いものでしたがねえ。原稿は多分焼きすてられたでしょう。これなかなか巧妙な脅迫方法で、それ自身一篇の探偵小説になっているじゃありませんか？」

逆輸入

次もやはり同じ読み役の話である。

「私共の寄稿家にPという人がありました。この人は数個国語に通じた頗る語学の達人な人で、ヨーロッパの主な国の主な雑誌をとってよいものがあつたら常に翻訳してくれるのです。ところがある時この人の翻訳してくれた小説を私共の雑誌に出しましたところ、発売後間もなく、「非常に面白い小説だが原作よりも一向よくなっていない。筆を入れた人はすべて原作を改善せ

んがためではなく改悪せんがため努力せられたようだ。詳しくは某々誌（米国の雑誌）某巻某号某頁を参照せよ」云々の甚だ気味の悪い投書が来ました。ブラウン老人はこれを見ると非常に立腹して早速その雑誌をとり寄せて調べてみますと、そこに問題の小説がそっくりそのまま出ているじゃありませんか。しかも私共の雑誌に出たのはその表題と作者名と人物の名とそして幾分語法を変えてあるだけで、しかもそれは投書が云っている通りいかにも拙い加筆なんです。で、P氏がその次に私共の事務所へ来た時に、ブラウン氏は右の某誌の小説のところを開けて、

『Pさん、面白いものを見せましょうか』

とP氏に突きつけたものです。P氏は黙ってそれを読み始めましたが、ものの一頁と読み進まぬうち真赤な顔をして言いました。

『ここに独逸語の読める人がいますか？』

『独逸語くらい誰だって読めますよ』

『じゃちよつと待っていて下さい。私は読んでもらいたいものがあるんです』

そう言つてP氏は大急ぎで帰つてゆきましたが、三十分ばかりすると一冊の独逸雑誌を掴んで息せき切つてやつて来ました。あとは申しあげなくてもお判りでしょう

が、某誌に出たものを独逸人が剽窃してその独逸雑誌に売りつけ、そいつを知らずにP氏が訳して私共の雑誌に出したというわけなんです。ただ面白かったのは独逸雑誌へ売り込んだという男の署名ですが、それはP氏の話によるとなんでも向うで相当名の知れた人だったそうです。相談の上私共はその独逸雑誌と私共の雑誌とそして原作の出ている某誌とを三冊一まとめにしてドイツの編輯者へ送ってやりましたが、それが着いた時はさぞ大変だったでしょうと、今でも時々思い出しては笑っています」

プレージャリズム

剽窃の話をしたついでにもう一つ。

一般に剽窃や焼直しや翻案（を創作顔して発表したもの）は必ず読者によって発見され編輯者へ報告されるものらしいが、近頃私は西洋のある雑誌で面白い例を見たおかげでプレージャリズムなんていう字を知って早速小見出しに用いたわけだが、盗まれた作家は日本の探偵小説愛好家も知っているはずの人だからちよつと紹介しようと思う。

「本誌十二月号に掲載したるチャールズ・エーンスウオース作『女の奇智で』なる作は本誌が筆名チャールズ・エーンスウオース事H・A・クニヴェトホフなる者より創作として英国における登載権を買取ったものであるが、右はナツシユ誌九月号に発表されたアルバート・ペイスン・ターヒュン氏作『トリックの袋』の剽窃でありその登載権はナツシユ誌の独占するものであることを発見した。吾人はナツシユ誌ターヒュン氏並に読者諸君に向つてその不明を陳謝し、クニヴェトホフ君の弁明書を添えて諸君の御了解を求むるものである」云々。

クニヴェトホフ君の弁明書なるものは相当長文の編輯者宛手簡であるが要するに自分の剽窃行為を認め（認めぬわけにはゆくまいが）米国のハースト・インタナショナル誌（ナツシユ誌と同系誌だ）に出ていたのが面白かったので、著作権法などというものがあることは知らずにやったのだというのだ。低能な青年か何かがほんとうに何も知らずにやったのかも知れぬが、それにしても苦しい言いわけで編輯者が何故こんな弁明書を採用してこれいしく誌上に印刷したかを疑いたくなるくらいだ。そんなことで編輯者は責任を逃れるわけにはゆかないのだから。がまあ、それは純然と手落であることを証明したかったのだくらいに軽く解してもよいが、ナツシユ誌

といえは堂々たる雑誌なのだから、五年十年の昔の号ならいざ知らず、僅々数ヶ月前のそれに出ている小説に気付かなかつたのは少々驚かれても仕方があるまい。一九二三年の出来事だ。被害者ターヒュン氏の作では「寶石培養家」という面白い話が新青年に訳載されたことがある。

幸福

その方が近いのでせい子は学校の行き帰りにはいつも氷川様の境内を通りぬけた。そこは小さな池だの森だのがあって小公園のようになっており、社殿の前の広場は近所の子供達のよい遊び場所になっていた。多くは彼女の学校の児童であった。中には彼女の受持の子も幾人かいた。彼等は濃紺の袴を裾短かにはいて小さな風呂敷包を左手で抱えた彼女の姿がゆるい石段を登って来るのを見ると、先生々々といって一様におじぎを集注した。中にはわざわざ彼女のそばまで駆けて来て頭を下げる子もあつた。彼女はいつも慈愛に満ちた眼元に愛らしい微笑を浮べてそれに答え、敷石に靴音も軽やかにそこを通りぬけるのだった。

石段の下の日あたりのよいところを選んで幼児のため
の砂場が設けてあつた。そしてその周囲には保護者のた
めにと幾つかのベンチさえ備えられてあつた。小さなバ
ケツやスコップを持った幼児達が子守や老寄としよりにつれられ
て来てそこで楽しい半日を送つた。その砂場へ、天気さ
えよければ一日おきくらいには遊びに来る兄妹きょうだいがあつた。
兄の精一さんが六つ、妹のみち子さんが四つ、お伴には
きまつて、女子大を出たという家政婦兼家庭教師の青木
さんがついていた。青木さんは子供達を遊ばせておいて
いつでも静かにベンチで編物をしたりビーズやリリアン
の手芸品を拵とぎえていた。

いつとはなしに彼等は仲よしになつた。それは子供達
の家というのが彼女の借りて住んでいる家の家主である
ということよりも、そしてその家が彼女の家の在る横町
の一角であるということよりも、何よりも彼女が子煩悩
であるのが原因をなしていた。子供達はおばちやまおば
ちやまといつてよく彼女になつた。実際この二人の子
供達は親もなく兄弟もなく、淋しい彼女にとつてたつた
一つの光明であつた。彼女は子供達にせがまれて、青木
さんと並んでベンチに腰をおろしてしばらく話してゆく
こともあつた。そういう時彼女は自分でもひどく好きな
ので将来はその方でやつてゆくゆくかとかとさえ時々は考え

幽霊怪盗

第一回

「太田君、また一つ骨を折ってもらいたい事件があるんだがね」

五月も末の、じめじめと歯ぎれの悪い雨の降る晩だった。朝刊の原稿を書きあげたところへ、社会部長の長谷川さんがやって来て、そつと耳打ちするように言った。

「実はね、船成金の古池が殺されたんだ。やっぱり幽霊強盗の仕業だ。例の髑髏（しやくろ）の符号のある脅迫状が残っているばかりで、手掛りはさっぱりない。それについて、いま警視庁から記事の差止命令が来たところなんだが、油小路子爵といい、北海鉄道の北村社長といい、こゝう頻々と富豪殺しがあつちや、われわれは枕を高うして警視庁に信頼していることは出来なくなるからね」

「全くですよ」私は煙草に火をつけながら言った。「一つわれわれの方で積極的に捜査を始めてみちやどうでしょう？」

「そこなんだ。僕も昨日からそれを思っていたんだが、実はね、いろいろ調べてみたところ、今度の古池氏はむろんのこと、油小路子爵も北村社長も、そのほかこの幽霊強盗の手にかかった連中は、みんな富士生命保険に保険をつけているんだよ。不思議じゃないか。中でも北村社長なんかは七万円もつけてあったというから、富士生命としては大分打撃だろうと思うんだが、それはそれとされるというのは、そこに何か曰くがあるんじゃないかと思われる。君、これからすぐに富士生命の寺井社長を訪ねて、意見を叩いてみてくれなにかね。次第によっては、費用と労力を惜しまず、徹底的に調べろという、社の社長（ちやう）の命令でもあるんだ」

「やりましょう！」私は元氣よく答えて、いきなり表へ飛び出すと、タクシを平河町へと飛ばした。

○
訪ねてみると、寺井社長は丁度いま帰宅したところだとして、すぐに客間へ通された。

客間へ通つてみると、そこには寺井氏はいなくて、令嬢の百合子が、父の秘書の照井三と二人、面白そうに何か話していた。百合子嬢は去年あたり四谷の女学校を出た、この家の一粒種、学校時代から乗馬とテニスがお得意で、近頃は自動車のドライブもはじめたとかいう活潑な令嬢だが、それでいて社交界の老婦人たちからも可愛がられているという、聡明な、いい意味でのモダンガールなのである。

「やあ、お待たせしました」

やがて主人の寺井氏が和服にくつろいで出て来た。私はすぐに来意を告げて、それについて何か意見はないかと訊ねた。

「いや、意見も意見だが、それよりも幽霊怪盗は私の手で押えたよ。いや、明日は必ず捕えてみせるよ」

寺井社長は元氣よく笑った。

最近頻々として、富士生命の多額被保険者が、幽霊怪盗の兇手に仆れるので、社内でもそれについていろいろの議論が行われたが、何はともあれ、一刻も早く怪盗を取り押えて被害を少くすることが急務であるというのが、社長の意見であった。そこで、彼は平常から雇つてある探偵を激励して、しきりに捜索に努めていたが、今日午後、その探偵の一人が、禿虎と綽名されたうす汚い男を

つれて来た。

「禿虎はかねて幽霊怪盗の一員として、魔の手先となつて働いていた奴なんだ」社長は葉巻をぶつと吹いて言った。「それがね、ある事情のため首領に恨みを抱くようになった、俺のところへ、探偵の紹介で、首領の秘密を売りに来たんだよ」

「じゃ幽霊怪盗って、一人じゃないんですね？」私は早く先が聞きたかった。

「そしてその首領というのは？」黙つて聞いていた秘書の照井が訊ねた。

「まあ待ちたまえ。禿虎の持つて来たのは、一枚の封筒だけだがね、その中に、首領の秘密いっさいが隠されているんだ。だから明日は必ず首領を押えてみせる。首領さえなくなれば、幽霊怪盗も何もありやしないさ」

こういつてまた、寺井社長はぶつと葉巻の煙を吐いた。私はもつと聞き出そう、せめてその封筒の内容が何人であるかだけでも聞き出そうと思つて追及してみたけれども、社長はもう取合つてくれなかつた。

「明日、明日、すべては明日だよ」と笑っているのみであつた。

寺井社長邸を飛出した私は、いったん社へ帰って、大
体の報告をすませ、得られただけの材料で朝刊の原稿を
拵えておいてから、本郷へタクシを飛ばした。呉健作を
訪ねるためである。

呉健作は中学時代からの私の友人であるが、大学教授
でありながら、一方非凡なる探偵的手腕を持つ男なので
ある。出身は医科であり、医科の教室を持つてはいるが、
何が専門だか私には判らない。電気のこと、化学のこと、
人類学のこと、天文学のこと、火薬学のことなどに明る
くて、その方が却って専門なのではないかと、素人の私
などには見えるのである。

小使に訊くと、呉健作はまだいるというので、私はい
きなり研究室へ飛びこんで行った。

「おい、事件をめつけて来たよ！」

呉健作は試験管やらビーカーやら、丁寧に附箋をつけ
た瓶やら取りちらかした試験台の向うから、静かに顔を
あげた。

「なんだね、騒々しい」

「事件だ。事件だよ。いま新聞でやかましい幽霊怪盗
——知ってるだろう？ 犯跡をちつとも残さない奴なん
だ」

「犯跡を残さない犯人というものは有り得ないよ。も

しそれが見つからないというなら、捜しかたが悪いから
だ。正しく捜し得る人がないからだ。——だが、幽霊怪
盗のことなら僕も少し調べてみたがね、現に被害者の家
族から依頼まで受けているんだ」

「だって、最近の事実はまだ知るまい？」

「なんだね？」

「寺井社長がね、富士生命の寺井社長がね、手掛を握
ったんだ。明日は首領を推えるんだと言ってるよ」

「えッ！」 呉健作は飛びあがらんばかりに驚いて、「ほ
んとうかい？ そして、寺井がそれを知ったのいつだ
い？」

「今日の午後だそうだ」

「ふむ、じゃ寺井は今頃はもう死んでるね」

「莫迦な！ たったいま僕が会って来たばかりだよ」

呉健作は私の言葉には耳もかさず、大急ぎで研究室用
の上衣を脱ぎすてながら、

「さ、太田、大急ぎだ。遅れると犯跡が薄れるッ！」

私は何がなにやらさっぱり判らなかつたが、ともかく
も呉健作の後について、夢中で飛び出した。

○

二人が寺井社長邸にタクシを乗りつけた時は、夜もだ

盲目物語

私は小さい時、小児麻痺まひを患つてから習慣になつて、毎月三回は按摩をとつてゐるが、その按摩がむつかしく、とにかくこちらの体を絶対動かさず、それでいて大概の人に負けないぐらい強く揉んでもらわないと気が悪いので誰でも頼むわけにゆかず、いつも来る按摩にさしかえのある時には、二日でも三日でも待つて、そのかかりつけの人の手のあくのを待つては揉んでもらつていた。そもそも、いつも来る人の師匠というのが、私に贅沢な揉み方の味を覚えさせてしまったのであるが、その師匠が、私の十八の時だったかに心臓麻痺で急死してから、その一番弟子が跡を引受けて来るようになった。しかし初めの間はどうしても療治後がさっぱりせず、ああで

もない、こうでもない注文をつけて、やっと、師匠とほぼ同じように揉んでくれるようになったのは五六年の後だったと思う。その間に二度、ふとした出来心で女の人に来てもらったが、静かに揉むことは揉むのだけれど、やっぱ力が足りず、一層凝こりをつのらせてしまい、シャレではないがそれこそゴリしてしまつてからは、新しい人は一切寄せつけず、以来二十年も一人の人にきめてしまつていた。

その人が珍らしく田舎に用足しに行つて、旅先で病氣になり、私の療治を十日もおくらせてゐるので、その家の者が気をきかせて、兄弟弟子の人を見習いに案内させてよこした。内玄関から小走りに部屋へ入つて来た女中が、

「お嬢さま先生」

と声をひそめて、さも大変だというように耳元にささやく。お嬢さま先生とは実は私のことで、私は持病があるので結婚する気になれず、降るようになつた縁談も断り、五年前に父を、続く翌年母を見送つてからは、一人居の淋しさをまぎらすために、ものを書いてみたのが、二三度雑誌に出たりした。それ以来、長年いる女中が威厳をもたせるためだと、初めは冗談のように云つていたが、いつとはなしにこんな風な呼びならわしになつてし

編者解題

中西裕

延原謙の仕事としては、〈シャーロック・ホームズ〉・シリーズの全訳をはじめとするミステリ翻訳者としての業績が今日ではまず挙げられる。しかし、それにとどまらず、『新青年』や『探偵小説』、戦後にあつては『雄鶏通信』各誌の編集長としての活躍も見落とせない。さらには、数はさほど多くはないけれど、創作ものしている。先に刊行された『延原謙探偵小説選』（論創社、二〇〇七）の続編として、そこに収録されなかった著作から、主として小説を集めて一書を編むこととなった。

また、本書には延原謙夫人、勝伸枝（本名・延原克子）の創作や随筆類もあわせて収めることにした。その点で特色のある巻となろう。勝については、座談会を除き、現在判明しているほぼすべての作品を収めることができただのではないかと思う。

延原謙の伝記的事実についての詳細は、拙著『ホームズ翻訳への道——延原謙評伝』（日本古書通信社、二〇〇九）、および前掲『延原謙探偵小説選』に付された横井司氏の懇切な解説に譲ることにするが、参考のために事典的に略記しておく。

延原謙は一八九二（明治二五）年九月一日に京都に生まれた。父は同志社で学んだあと札幌独立教会でキリスト教伝道師を務めた竹内（竹のうち）（旧姓・馬場）種太郎、母はのちに津山で竹内女学校を開いて教育者として活躍した竹内文（ふみ）である。謙の名は、戸籍には「ゆづる」とルビが振られているが、一般に「けん」の読みで通した。延原姓になっているのは、次男であったことから、祖母の妹まさ（本来の表記は変体仮名）の養子となったためである。これはあくまでも書類上の措置であり、延原家の人たち

[著者] 延原 謙 (のぶはら・けん)

1892年、京都府生まれ。本名・謙 (ゆずる)。早稲田大学理工科卒業後、逓信省電気試験所に勤務。1928年に博文館へ入社、『新青年』三代目編集長となり、以降、『探偵小説』や『朝日』の編集長を歴任。戦時中は揚州へ渡り、貿易業と映画館経営に従事した。終戦直後に帰国し、47年から51年まで『雄鶏通信』編集長として活躍、同誌が廃刊してからは翻訳業に専心し、52年に〈シャーロック・ホームズ〉シリーズの個人全訳を完成させた。77年、急性肺炎により死去。

[著者] 勝 伸枝 (かつ・のぶえ)

1905年、愛知県名古屋生まれ。本名・延原克子。雙葉高等女学校卒。詳しい経歴は不明だが、1930年代に勝伸枝名義で創作探偵小説を精力的に発表した。延原謙の妻であり、岸田國土の妹。2002年死去。

[編者] 中西 裕 (なかにし・ゆたか)

1950年、東京都生まれ。早稲田大学第一文学部日本史専修卒。早稲田大学図書館司書、昭和女子大学短期大学部助教授を経て、同大人間社会学部教授となる。2015年に退任し、現在は昭和女子大学や早稲田大学の非常勤講師として教鞭を執る。主編著に『主題書誌索引』など。主要論文に「青山霞村の系譜・出自に関する一考察」など。2009年、日本古書通信社より延原謙に関する研究をまとめた『ホームズ翻訳への道 延原謙評伝』を刊行。

のぶはらけんたんていしやうせつせん

延原謙探偵小説選Ⅱ

〔論創ミステリ叢書 121〕

2019年9月20日 初版第1刷印刷

2019年9月30日 初版第1刷発行

著者 延原 謙・勝 伸枝

編者 中西 裕

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

©2019 Ken Nobuhara & Nobue Katsu, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1739-2